

高田保馬における自然と作為

——『社会と国家』における多元的国家論をめぐって——

東京大学 齊藤史郎

1・目的

現在、高田保馬が議論される、あまり多くはない領域の一つに、地域社会を考える上での、「地域」の自律性という問題がある。これは直接には鈴木栄太郎の「自然村」論をどう評価するのかという問題でありながら、その背景に鈴木の高田理解、ひいては高田における社会と国家の関係如何という問題が控えているからである。

以下では、高田のいわゆる「多元的国家論」がいかなるものであるのかを整理した上で、高田理論における社会と国家との関係が、その社会学理論、とりわけ社会本質論及び社会成立論とどのような関係にあるのかを明らかにするための視角を論じる。

2・方法

(1)『社会と国家』における議論及び『社会学原理』『社会学概論』における議論を素材として、高田理論における社会と国家の関係を概観する。

(2)Pankokeらの研究から19世紀後半のドイツにおける「社会学」の成立史における社会と国家との関係とを概観し、高田の議論との比較を行う。

(3)高田理論の特色としての、人間の作為よりもありのままを重視するという意味での自然主義の例を、『社会学原理』の叙述から抽出する。

3・結果

(1)高田が全体社会を国家から区別するのは、前者が原初的な人と人との結合に基づき、国家を含む様々な部分社会を形成する基盤となるものとされたからである。

(2)ドイツにおいては社会は国家から問題領域として抽出される一方で、人為によって作られる(sittlich)ものと理解されていた。

(3)高田の議論には、社会を人間の自然の欲望によって形成・展開されたものという理解を示すものが多く、人為による自然との断絶を論じた箇所は発見できなかった。

4・結論

高田はその多元的国家論を、欧米の議論とは独立に自ら打ち立てたと述べているが、その議論は確かにオリジナルなものであり、高田の社会学理論に基づくものであった。

文献

- ・ 高田保馬、1919『社会学原理』岩波書店、1922『社会と国家』岩波書店、1922『社会学概論』岩波書店
- ・ 鈴木栄太郎、1940『日本農村社会学原理』思潮社、1970『鈴木栄太郎著作集Ⅳ 農村社会の研究』未来社、1975『鈴木栄太郎著作集Ⅷ 国民社会学原理ノート（遺稿）』未来社
- ・ Kennichi Tominaga 1989, 'Introduction Yasuma Takata: An Intellectual Portrait, in "Principles of Sociology" University of Tokyo Press
- ・ 富永健一 2004『戦後日本の社会学——一つの同時代史』東京大学出版会
- ・ 小林甫、「高田保馬の社会学理論——鈴木栄太郎の関わりを通して——」金子勇編著『高田保馬リカバリ』2003年 ミネルヴァ書房
- ・ 山崎仁朗 2012、「鈴木栄太郎における「自然」と「行政」——「地域自治の社会学」のための予備的考察——」『社会学評論』63巻3号日本社会学会
- ・ Eckart Pankoke, 1970 "Social Bewegung—Social Frage—Social Politik" Ernst Klett Verlag